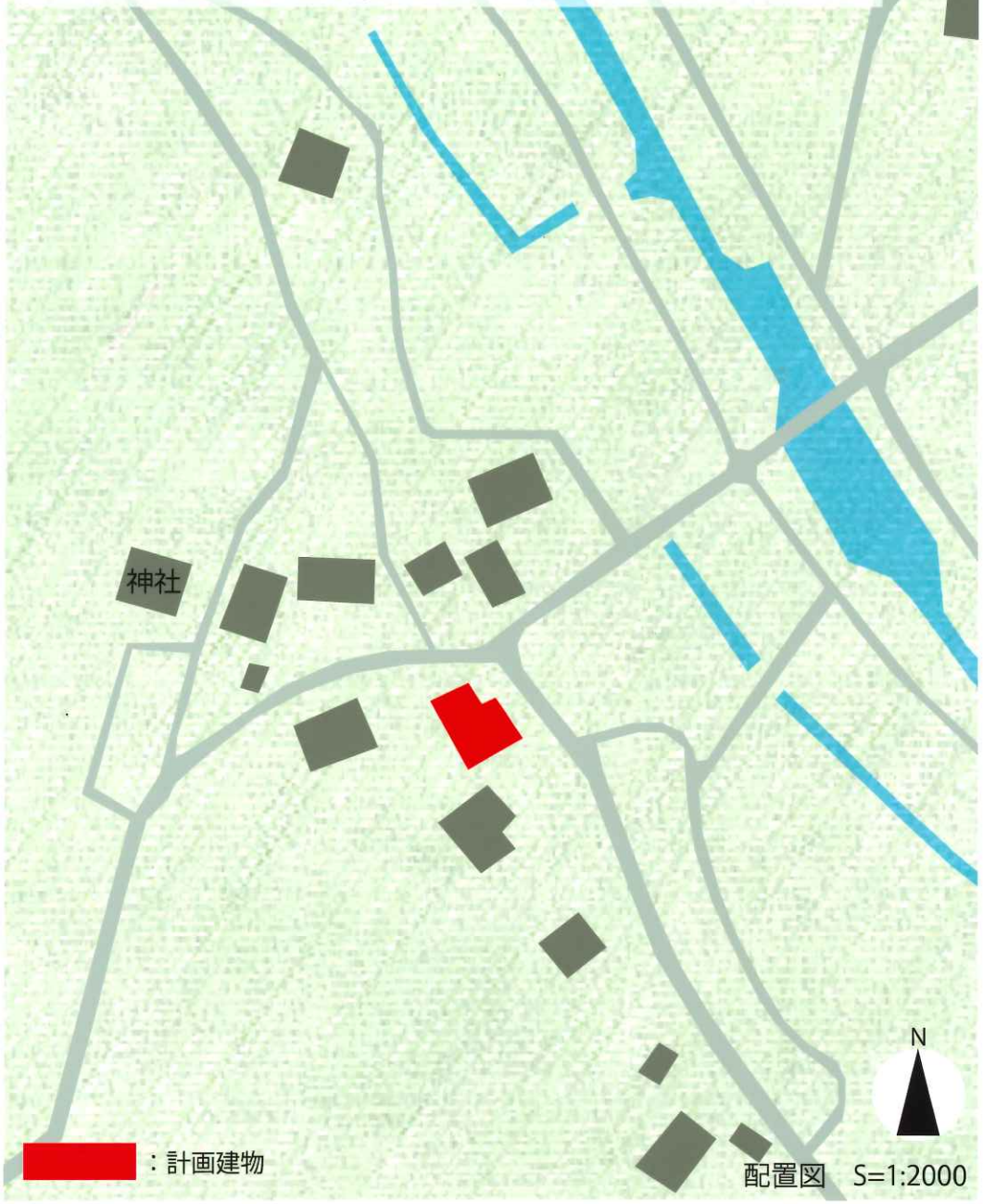
おおきな玄関をもついえ～玄関を開いてまちとつながる～

■Back ground

このプロジェクトは、架空ではなく、実在し、現在進行中のプロジェクトである。
ここは、茨城県竜ケ崎市にある自然豊かな場所である。
この場所は、東日本大震災に見舞われ、計画する築 45 年の住宅も被災してしまった。
幸か不幸か、この土地は市街化調整区域に指定されている土地で、むやみに建て替えることは難しい土地である。
もともとこの地域は、地域住民の交流がさかんに行われている地域で、近所にある神社ではよく催し物が開かれていた。
玄関も開きっぱなしで、近所の人との交流がさかんであった。
あの東日本大震災が起きるまでは、、、。
東日本大震災以降は、住民の地震に対する不安からか、地域交流があまり行われなくなってしまった。つまり、個々の住宅は閉じてしまったのだ。
クライアントは寂しそうにそう語る。「あのころはよかった」と。
ならば、リノベーションによって古き地域性を大切にし、新しい価値の再発見を行うことで、この住宅が、地域にとってのなくてはならない「公共性」を帯びた住宅として復活させることで、地域の活力が戻らないだろうか。
「公共性」を住宅に持たせることで、いつもの暮らしも、もしもの暮らしも多少変われど、持続したコミュニティを形成することができる。
施主の家族はもちろん、周辺の地域住民もいきいきするような、地域に開かれた住宅のあり方を模索することで、日本における衰退した閉ざされた地域の解決策の一つの回答として示すことができるのではないだろうか。
地域に住宅を開くといっても様々であるが、その開きかたの一端を明らかにすることができれば、住宅という個々の問題ではなく、街全体の問題として扱うことができる。
さあ、住宅をどのように開けば、住人も地域の人もストレスなく、適度な距離感で実現可能なのだろうか、その旅に出かけよう！

計画建物は、のどかな自然に囲まれた、昔ながらの地域のコミュニティが形成されていた場所に建っている。震災でコミュニティが崩れているため、コミュニティの復興も今後の課題となっている地域でもある。



配置図　S=1:2000

■Concept

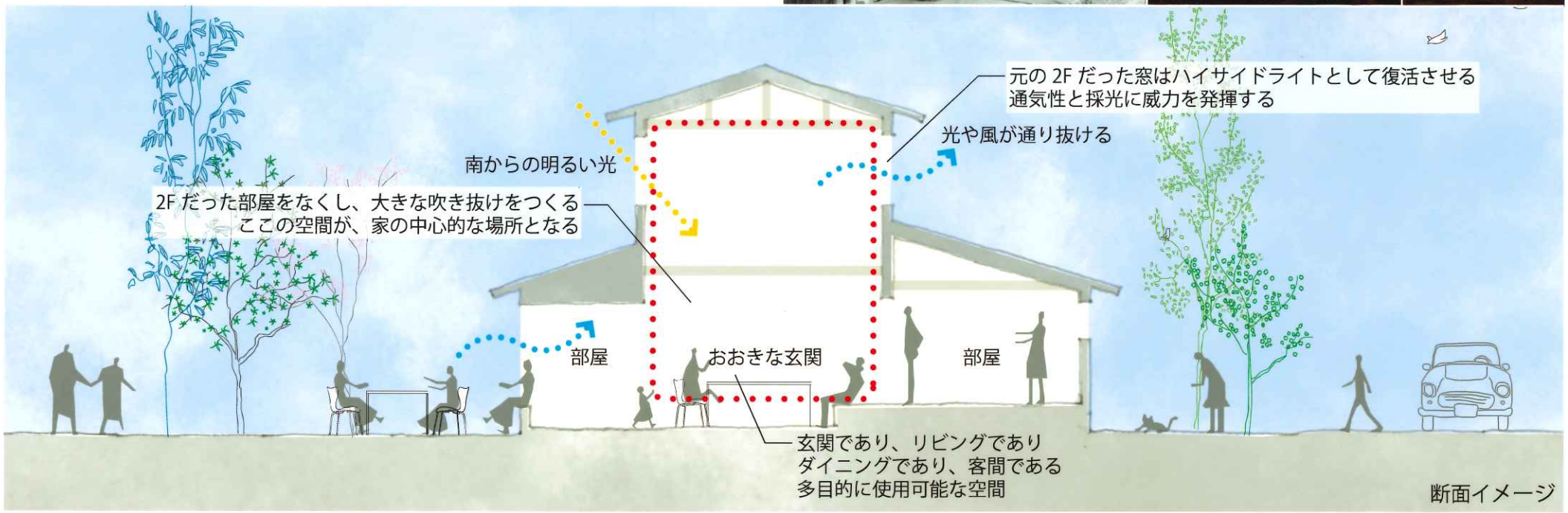
そもそも住宅の中で公共性の高い場所（外部と接する場所）とはどこなのだろうか。
そんな中着目したのが、「玄関」である。
玄関は住宅の中でも、特に外部と接する機会が多いため、公共性の高い空間といえる。
従来玄関とは、住宅の顔であり、周辺のコミュニティとの関係性を生み出すことのできる、いわば「住宅の心臓」のような役割を担っていたのではないだろうか。
現代の住宅に見られるような玄関を靴を脱ぐためだけの退屈な空間にしてしまうのではなく、玄関を再定義し、玄関を住宅を開くきっかけとして捉え、多目的な玄関という空間をもった住宅を考えてみることにする。
再定義された新しい「玄関」は、住宅の中心であり、様々な活動が行える場所となり、住人にとってはリビングのような、地域住民にとっては地域公民館のような場となる。
この計画では、その玄関のもっていた潜在的長所を伸ばしながら、現代に置き換えることで、住人にとっても地域の人にとっても適度な距離感で無理のない生活を送ることができる。そんな適度な開き方が、この先のまちや住宅に必要ではないだろうか。

現代の玄関

古民家の土間玄関

かつての玄関は土間であったため、家族のリビングのようでいて、地域のリビングでもあった

コミュニティの発端はそんな些細なところからはじまる

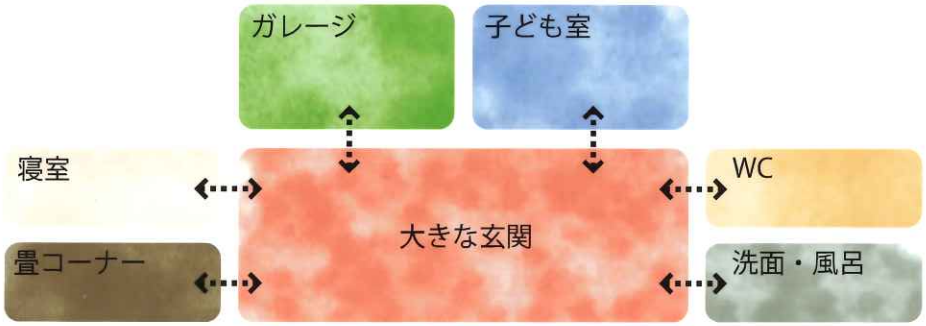


断面イメージ

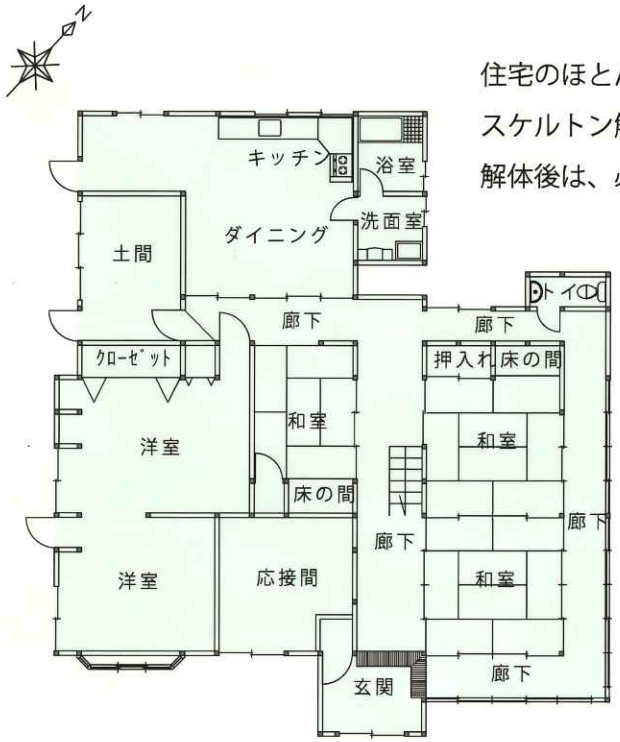
夢アイデア 2019

■Diagram

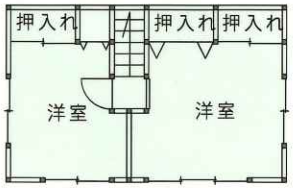
大きな玄関を中心に各部屋がつながる玄関の上部は、もともとあった 2F 部分を撤去し、吹抜けとするため、ダイナミックな空間となる。
大きな玄関からはじまる新しい生活。新しいコミュニティのありかた。



住宅のほとんどが被災してしまったため、
スケルトン解体を余儀なくされた。
解体後は、必要に応じて、構造補強を行う。



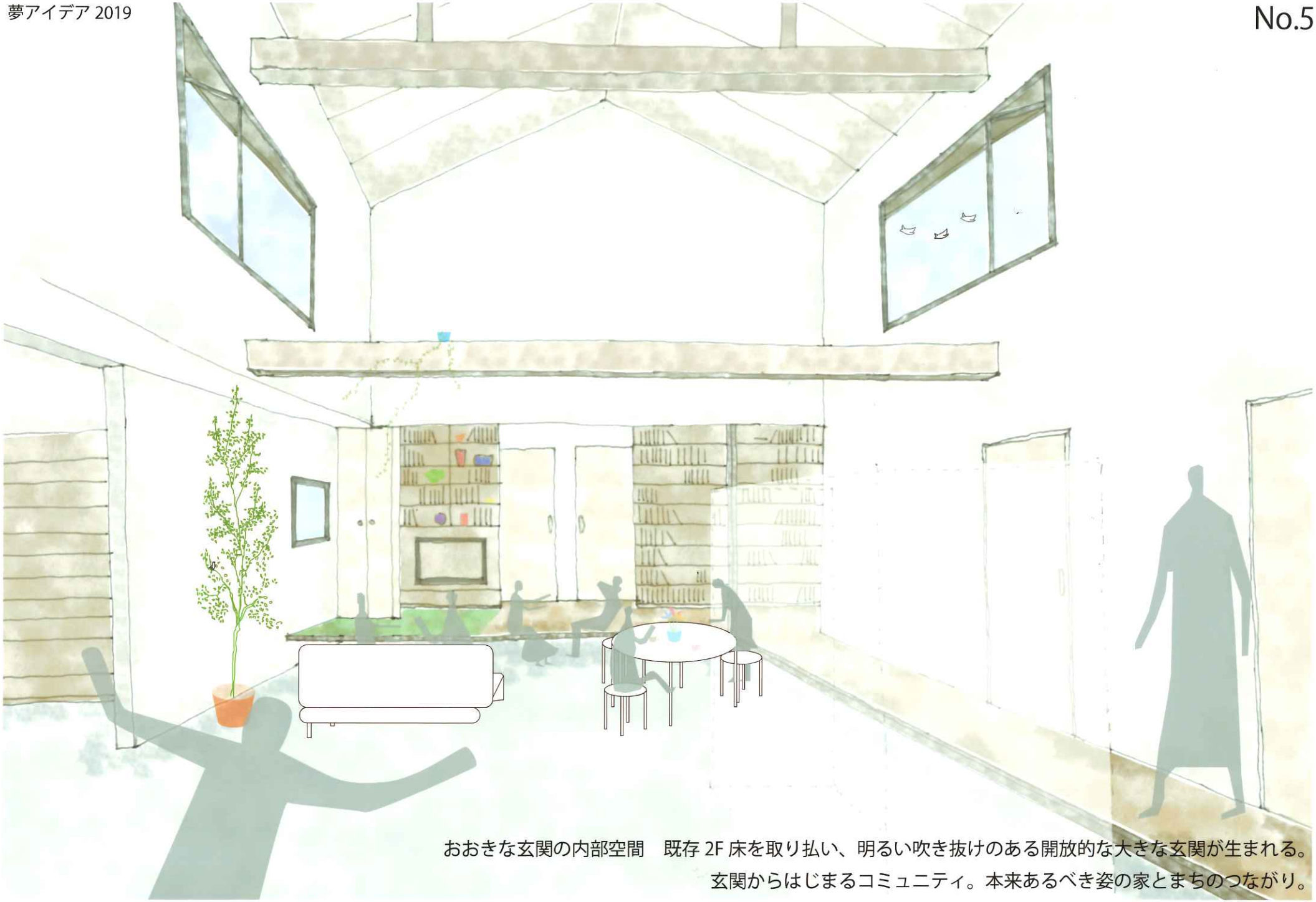
1F Plan(既存)　S=1:200



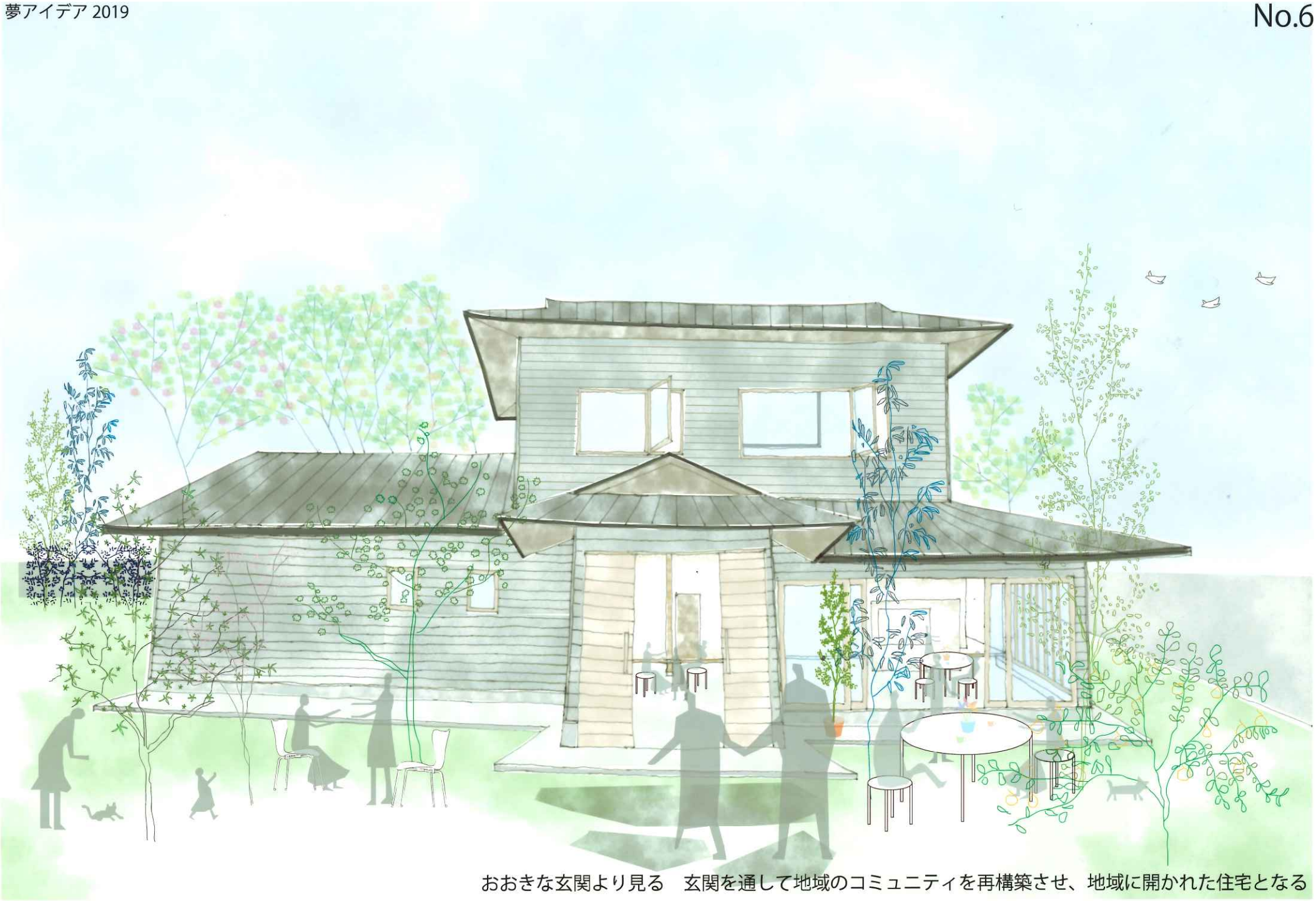
2F Plan(既存)　S=1:200

No.4

1F Plan(新規)　S=1:200



おおきな玄関の内部空間　既存 2F 床を取り払い、明るい吹き抜けのある開放的な大きな玄関が生まれる。
玄関からはじまるコミュニティ。本来あるべき姿の家とまちのつながり。



おおきな玄関より見る　玄関を通して地域のコミュニティを再構築させ、地域に開かれた住宅となる